

図書館閉鎖へ

図書館長 加藤光男

物騒なタイトルだがこれはカリフォルニア州サリーナス市でのことである。ここはノーベル賞作家スタインベックの故郷で、スタインベック図書館など三つの公共図書館すべてが近く閉館されることになった。市の財政難が理由であるが、図書館の「冬の時代」を嘆く声が上がっている。さらに、全米図書館協会の2003年の調べでは、41州で計5,000万ドルの予算がカットされ、約1,200館が開館時間短縮や職員削減を迫られた。(01/16)この新聞報道には本当に驚かされた。スタインベックを研究している者として、1974年初めてこの地を訪れたのだが、そのときは「サリーナス図書館」という名前だった。それから間もなく現在のようにスタインベック図書館となった。郡庁所在地でもあるサリーナス市は静かな農村地帯の中心地であり、図書館はいつも賑わっていて、一日の利用者は平均1,900人といわれる。

これがアメリカだ、と妙に感心した。というのは、財政が許さなければどこかにしわ寄せをする。今回は生活に直接関係のない図書館にそれを押しつけたということであろうか。たとえそれがスタインベック図書館であっても例外ではない。行政の力強さを感じるとともにブッシュ大統領の手腕とも重なり、複雑な気持ちになる。「偉大な作家を生んだ街の悲劇だ」という図書館職員の「書庫はそのまま保存して、財政が回復すれば再開したい」との考えにほっとした。

しかし、図書館の財政逼迫は海の向こうだけではない。日本でも「どうなる公立図書館」という記事が新聞に載った。それによると、山梨県山中湖村の村立図書館の運営は村直営ではなく、NPO「地方資料デジタル化研究会」がその運営を任せられ、費用の削減に成功した。契約期間は3年間で村からの年間予算は1,500万円で、直営と比べると約700万円安くできるといふ。秘密は人件費であった。(朝日新聞2/2)

上の記事のように図書館の運営を外部委託するのは、さまざまに形態は異なるが、珍しいものでなくなってきているのが日本の公立図書館の現状である。そして、全国の大学図書館でも例外ではない。札幌大学でも以前から図書の受け入れ業務などを委託している。その目的ははっきりしていて、人件費を中心にした予算の圧縮である。幸い2005年度は前年度とほぼ同額の予算を執行できる見通しであるが、毎年予算策定期には図書館としてはつらい査定を余儀なくされている。

そのような状況にあっても、どこの図書館でもそうであるが、最も心を砕くのはサービスの向上である。どこにベテ

ランを配置するかなどの人事は当然のことであるが、それだけでなく、多様化する貸し出し資料の適正な選択と収集には予算の配分を含め、頭を痛めるところである。

昨今の図書館は以前とは違って、紙媒体いわゆる書籍だけを扱っているのではない。以前からあったマイクロフィルムに変わって電子媒体によるサービスが当然の時勢になっているのだ。電子検索は多額の費用を掛けて、さまざまな分野で世界的規模でアクセスできるようになっているし、大学の紀要類もバックナンバーから電子化し、新しく発行されるものも紙媒体は極端に少なくなり、コンピュータに向かって必要なものだけを自分でダウンロードして使う時代に突入したと言って過言ではないであろう。それに映像や音声のライブラリーも利用率が高く益々増大している。

こんな時代であるから、札幌大学図書館で近年力をそそいでいるのが、図書館の利用方法、図書検索などを学生に知ってもらうことである。年度当初には新入生のさまざまなクラス単位で図書館の授業をもち成果を上げている。そして、図書館の開館時間に関しては驚異的とも言える。1年で閉館するのはわずか13日で、352日は利用可能である。そして、一般市民にも開放されているのである。これだけのサービスを質を落とさずに実行するのは並大抵ではないが、大学図書館の使命として、研究に出来るだけのお手伝いをしているのである。ただ、今後のことを考えると、電子化を進め、電子媒体に頼るとしても、例えば札幌圏の大学はあらゆる点で協力していくという体制が求められるかもしれない。今後大きく変わるのが図書館のサービス、あるいはその利用方法であろう。しかし、海の向こうとは違って、我々はどんなことがあっても決して「図書館閉鎖」だけはしないことを約束できる。



2002年、スタインベック生誕100年記念国際学会にて